

コロナにとらわれなくなったフランス人 何が変えたのか

22/8/26 竹内真里・フランス在住ライター毎日新聞

この夏、フランスでは、バカンスを楽しむマスクなしの人たちの姿が各地で多くみられた。日本と違って、国内の新型コロナウイルスの新規感染者数は低く抑えられているが、どうやらそれだけではなさそうだ。何がフランス人の心を変化させ、コロナ対応を変えさせたのだろうか。そこから日本人が学べることは。

水際対策を緩和、マスクは少数派

喜ばしいことに、フランスでは8月1日から水際対策が大幅に緩和された。これまで入国時に求められていたワクチンパスや、陽性か陰性かなどの事前の検査も不要となったのだ。フランスから外国へ旅行する際、まだ事前検査や接種証明などの提示などを条件にしている国もあるので、行き先の情報を調べる必要はあるが、フランスでの入国は面倒な手続きが不要となり、簡易になった。

そんなことも関係してか、パリ在住の友人たちの話によれば、「パリジャンはバカンスで留守、観光客でいっぱい」の8月のパリ」の光景が戻っているという。リヨンの観光スポットでも外国からの旅行者を多く見かけた。レストランや土産物屋などが建ち並ぶ小道を練り歩き、観光を楽しんでいる様子が見える。

マスクはもうほとんどの人がつけていない。3年半ばにまず国が「医療機関や公共交通機関など、特定の場所以外はマスクの着用義務を解除する」と通達し、人々もどうやら四六時中つけていなくても大丈夫そうだ、と日々の状況から判断し、移行していった。

医療機関ではマスクの着用が求められるが、推奨が続いていた公共の乗り物内で着用する人はほとんど見られなくなった。スーパーマーケットや街中などで、たまにマスク姿の人がいても、「あの人は着用したいからしているのだな」という雰囲気、対立や責め合いなどは見られない。周囲の人たちが、マスク姿の人を避けたり、距離をとったりする様子も特にない。

マスクなしの生活がメジャーとなり、観光客が戻り、バカンスで多くの人たちが国内外を移動しても、騒動の初期に見られたような恐ろしい報道はなくなった。

救急科がパンク状態だとか、医療崩壊などのニュースもない。医師も夏休みをとっている。このように書くと、フランスの病院はベッド数が多いとか、す



気温37度の旧市街。アイスや冷たい飲み物で喉を潤す観光客たち=筆者撮影

ぐに受診できる仕組みなのだろうなどと思われるかもしれないが、そうではない。新型コロナ騒動が勃発するずっと前から、慢性的に人員・病床・予算不足などの医療体制をめぐる問題があり、長いこと改善を求められ続けているのだ。そこにきて、新型コロナワクチンの接種を受けていないという理由で職を追われた医師や医療従事者、救急隊員、消防士などがあるので、人員不足はさらに深刻となった。復職はまだ認められていない。

気温も湿度も高い夏の日本で、今もマスクの着用が続く状況を考えると、想像するだけで呼吸が苦しく、体に悪いと思う。せめて季節や状況によっては、マスクを外して、普通に呼吸し、顔を出せる日常に切り替えられることを願う。

もう新型コロナにとらわれない

この夏休み中に、違う地方に住む友人らと再会した。パリ在住のフランクさんは、移動制限が解除されて以来、友人や姉弟たちと国内外をあちこち旅行している。

食いしん坊のフランクさんとリヨン市内のレストランへ向かった。私たちが着席してまもなく、続々とお客が入り、店は満員、外には行列ができた。英語やスペイン語、イタリア語などが聞こえてくる。各テーブルの配置はきつきつで、やっと通れる狭い間隔しか空いていない。料理人もウェーターもお客も誰もマスクをしていないし、店の前に配置されていた手指消毒ジェルもない。ウェーターは忙しくテーブルの間を歩き回り、なじみの客以外にはぶしつけな態度を取り、お客は大きな声でおしゃべりをする、新型コロナ騒動以前のフランスのレストランらしい雰囲気が戻っていた。

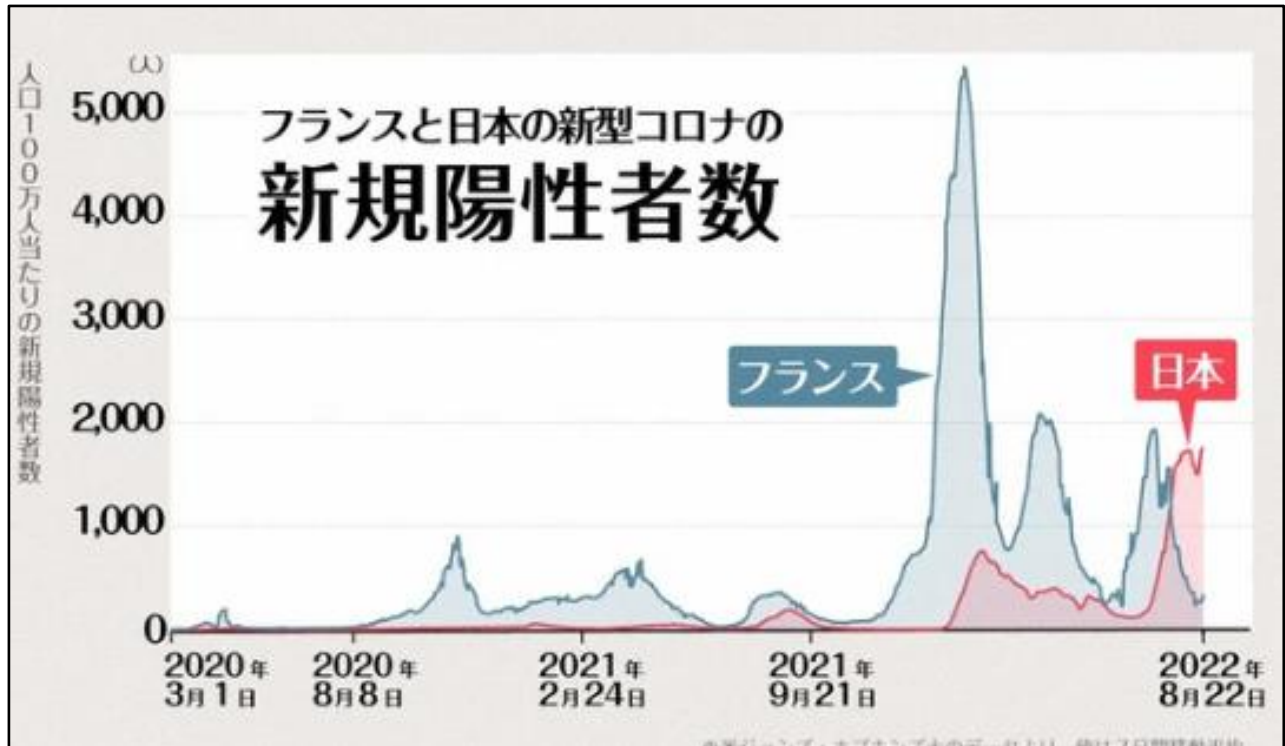
隣席には、北部の街リールでレストランを経営するバカンス中の家族が座った。話を聞くと、現在は客足も戻り、売り上げも回復。新型コロナ下まっただ中に、配達やクリック&コレクト（注文品を店で受け取るサービス）を導入したが、現在はやめて通常営業に戻ったそうだ。「私の店はお客とのコミュニケーションがあつてこそ。にぎわいを取り戻して、作りがいがありますよ」と話していた。

また別の日は、マルセイユ在住のジョージアンヌさん一家とともに、南東部のアヌシーに出かけた。ちょうど湖畔で開催される花火大会がある日で、街はとても混雑し、賑やかだった。前回会った1月ごろは、次々に発表される新しい株の出現（当時はオミクロン株）に、強い不安を吐露していて、人混みに出かけることも極力避けていたジョージアンヌさんだったが、今回は普通にハグとビズ（フランス式の頬をくっつけるあいさつ）であいさつした。コロナのコの字も、話題に上らなかった。

友人たちも街の人たちも、もういいかげん、自分の人生を生きるぞ、という感じで、新型コロナにとらわれていない。ずいぶんと恐れて、おびえていた時もあったけれど、それは過去のこと。2、3年も中ぶらりんになった自分の時間を、取り返してやるぞとばかりに、今を生きている。

仏公衆衛生局は19日、「6月初旬から始まった『第7波』は、落ち着いた傾向にある。本土では感染、入院の数も高いレベルではなく、状況は改善している」と発表した。21日の新規感染者数は1万4820人で、日本の10分の1以下となっている。

現在は、日本より制限がゆるいフランスで、何が効力を発して減少傾向にあるのか、分析結果は見当たらない。理由としては、夏休み期間中はバカンスで検査を受ける人が極端に減っている▽オートテスト（自分でできる検査）が普及していて公式感染者数にカウントされない——などが考えられる。



今後、状況がどのように変化するかによって、再び規制が強まることもあるかもしれない。しかし、マスコミの過熱報道も減り、メインピックではなくなった。次第に人々の関心が新型コロナからそれて、他のことを楽しむようになった、とはいえるだろう。

恐怖ではなく、楽しみを根底に行動する人が増えた

フランスでは多くの人たちが、新型コロナワクチンを3回接種したものの、感染は避けられなかったことを体験した。自身や身近な人たちの体験から「2020年の初めごろと現在では、状況は変化している。個人で異なるが、多くの人の場合、だるさや発熱などの風邪症状で済み、回復している。必要以上に恐れることはない」と判断していることも大きいのだろう。

ちなみに4回目の追加接種対象は60歳以上となっているが、昨年のような接種を非常に強く促す雰囲気は薄れた。私の知る対象年齢の人たちも、効果について半信半疑というより、むしろ必要性を疑問視する人が増えた。

振り返ってみると、フランスでは20年の春から外出もままならなかった。制限時間付きで距離も指定され、外出許可証に日付と名前をサインし、携帯していた。違反したら罰金。情報源のテレビでは、連日人工呼吸器でつながれた患者の映像が流れていた。他人をウイルス扱いするような雰囲気もあった。あらゆるものを拭いたり、布マスクを手作りしたり、私たちはどこまでも振り回された。不確かなものへの恐れが放つ力は強かった。医師や科学者、専門家を名乗る人たちの意見もさまざま、分かれているのはフランスも同じだ。しかし、徐々に状況が変化し、自分と周囲をしっかりと見て、なにが起きているのか、判断する人が増えてきた。ずっと中止されていた各種イベントも開催されるようになり、ほぼ「普通の生活」に近づき、街に活気が戻った。

時間を止めることはできない。月日は着々と流れていく。植え付けられた恐怖を根底に行動するのはもう終わりにしよう。